

国立歴史民俗博物館の愉悦②

# 異形台付土器

## (千葉県井野長割遺跡)

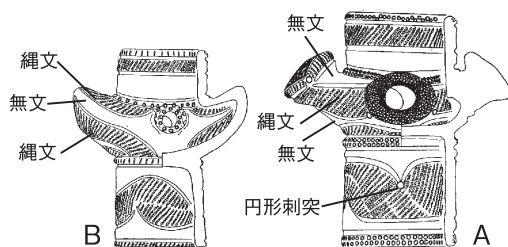


井野長割

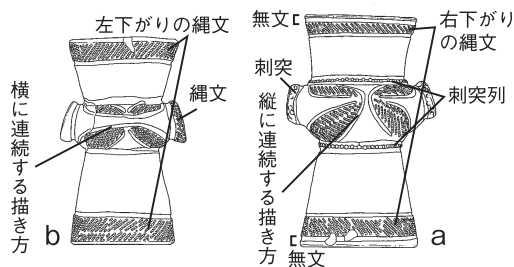
見ると、Aは、側面の先端が瘤のようになっていて、Bは尖っている。中段の文様は、Aは上から無文・縄文・無文となつているのに対し、Bは、縄文・無文・縄文である。Aの下端の縄文の輪郭線の交点には円形刺突がある。また、単に焼成時の偶然かもしれないが、Aは半分以上が黒ずんでおり、Bは

異形台付土器とは不思議な形をした台付の土器という程度の名称で、用途は不明である。円孔が向かい合つて二つ開けられていることが多い。西村広経氏の研究によると約六五〇点が、縄文時代後期中葉〜後葉の東関東地方を中心に分布する。一時は東北・北海道まで分布を広げるが、再び東関東に収斂していく。この時期の大きな遺跡では珍しくはないが、鍋のように日常的に使う土器と比べると遙に数は少ない。広い範囲で共通の儀礼具として利用されたと考えられている。

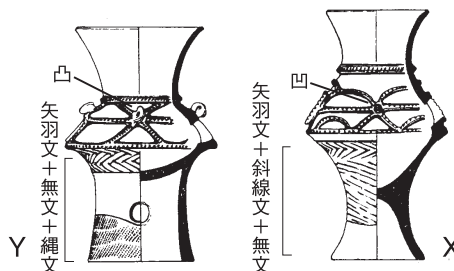
ここで紹介するのは、国立歴史民俗博物館のお膝元、千葉県佐倉市の国史跡井野長割遺跡から一九七三年に出土したもので、常設展示している。この二点(写真)は同じ竖穴住居跡の床面から出土した。この時期の異形台付土器には竖穴の床面から二個セットで出土する例が、千葉市加曾利貝塚、東京都町田市鶴川遺跡群にもある。大事なものは、これら三組(図)とともに、大きさまや文様であえて対照的なもの同士が選ばれているということがある。



井野長割例



加曾利例



鶴川例

縮尺不同

ページユ色である。

続いて加曾利例を見てみよう。上段・下段の縄文の向きがaが右下がり、bが左下がり。最上端・最下端を見るとaは無文部分が巡るのに対し、bはそれが無い。孔を縁取る文様はaは刺突、bは縄文。中段の文様は、aは縦方向に連続して描くのにに対し、bは横方向である。aは中段の上下に刺突列を巡らせるが、bには無い。鶴川例については『町田市立博物館収蔵考古資料目録』で、Xは中段の文様の交点が凹んでいるのに対し、Yは出っ張っていること、下段の文様が異なることが指摘されている。

これら三組の対照性は偶然とは思えない。実は、そのような眼で探すと意図的に対照的な器物を配置する例は少なく無い。前期後半には大・小、赤・黒、有文・無文の違いだけでなく、置き方(正位・逆位)も対照的な浅鉢の出土例がある(岐阜県高山市糠塚遺跡)。中期末〜後期初頭には、石棒を二本または四本床面に配置する際に、石材の違う二色味の違うものを配置する(東京都国立市緑川東遺跡、横浜市松風台遺跡など)。対照的な形状にするためにその場で不要部分を打ち割る場合もある。

本例は、こうした縄文人の複雑な思考を伝える興味深い資料なのである。(国立歴史民俗博物館 研究部准教授 中村耕作)